

特集

コロナに負けず、“いま”できる活動を！



新型コロナウイルスの影響が続いているいま、人とのつながりの中で行われてきたボランティア活動も制限されています。そんな中、いまできることを考え、実践している団体もたくさんあります。今回は、3つの団体をご紹介します！



足羽高校JRC部～マスクケースづくりボランティア～



足羽高校JRC（青少年赤十字）部では、自分達が食事や体育の授業時にマスクの片づけ方に困ったことがきっかけで、マスクを衛生的に保管できるケースをクリアファイルで作成しています。6月に麻生津小学校へ450個を寄贈したほか、自衛隊福井地方協力本部や松島水族館レストラン、三国サンセットビーチの浜茶屋「ダイヤモンドヘッド」等で、活用してもらっています。

8月3日にはさらに多くの人に役立ててもらおうと、福井市役所食堂「ラートハウス」にJRC部員5人が訪れ、お客さん一人ひとりに使い方を説明しながらマスクケース110個を配布しました。部長の上野日菜さんらは「2月まで実施していた献血の呼びかけや募金活動等がコロナの影響でできないため、今の状況に必要な活動がないか考えた。マスクケースを『ありがとう』と受け取ってもらえると嬉しい。作ってよかった。」と新型コロナ対策に協力できる喜びを語ってくれました。



▲マスクケース配布の様子



手話サークルどんぐり～コロナ下でも表情の見えるコミュニケーションを～



手話サークルどんぐりは、耳の不自由な人との交流を通して手話を学ぶことを目的としたサークルで、毎週木曜日の午前中にメンバーが集まり、手話の学習や交流をしています。新型コロナウイルスの影響で、一時活動をお休みしていましたが、現在は、感染予防対策をしながら活動を再開しています。

現在、ほとんどの人がマスクをしています。聴覚に障がいのある方は口の動きや表情なども見ながら会話するため、マスクで顔が隠れると会話が難しくなります。そこで、サークルでは距離をとってフェイスシールドを利用するなど、表情も見えるよう工夫して活動しています。

聴覚障がい者の内村辰雄さんは、「フェイスシールドや透明なマスクを使えばコミュニケーションが取りやすいけれど、使っている人は少ない。聴覚障がい者にとっても生活しやすいよう、表情が見える感染予防対策も広がってほしい」と話していました。



▲サークル活動の様子



大学生 江川雄大さん～折り紙リボンづくりボランティア～



江川さん（福井県立大学4年生）は、「コロナ禍の中で自分にできることがないか」と、家でできるボランティアを探していた時に、中学時代に入院した際、折り紙の千羽鶴をもらい元気になったことを思い出して、手づくりマスクプロジェクトの中の折り紙リボンづくりボランティアに参加してくれました。

リボンづくりの感想を聞いてみると、「『折り紙ボランティア ブーケ茶論』の方々が丁寧に教えてくださったので、スムーズに折ることができた。また、家での勉強の合間に折って、気分転換にもなった」と話してくれました。

ボランティアに元々興味があり、人や地域の役に立ちたいと考え、これまでも人権学生ボランティアや災害ボランティアなど、積極的に活動してこられた江川さん。「様々な体験を通して多くの人と関わり、幅広い視野を得て将来の仕事につなげていきたい。今後はマスクづくりにも挑戦してみたい。」と、今後の目標も意欲的に話してくれました。



▲折り紙リボンづくりの様子